

1月報(2024年) 萌 カトリック福山教会



福山教会活動テーマ：

「喜びをもっていのちをもたらす福音を社会に伝えよう」

〒720-0808 福山市昭和町 7-26

☎【084】923-0614 FAX【084】923-0615

e-mail : fuku-ch@ktd.biglobe.ne.jp

【待降節黙想会】

佐藤紀子



長束修道院から塩谷神父様をお招きして少し個人的な感想になりますがふれてみたいと思います。

最初、掲示板に貼ってあった神父様のお写真を見て、なんて神父様らしい優しい威厳に満ちた方だなどと思い、しばし男性の方なのに見と

れていたと私の側にいた方も同じ意見でした。印象的に残っています。

塩谷神父様は長束黙想の家を中心に霊操や聖書研究のお手伝いをされていらっしゃる。洗礼の為の勉強の指導をされて養成の為に幅広く尽力して下さっています。

ご高齢でいらっしゃるのに、とても力強く言葉に重みがあって、クリスマスを迎えるのに嬉しくてキリッとした緊張感と穏やかな会の雰囲気良かったと思います。

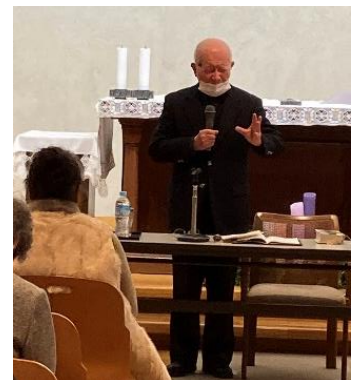
世界が動乱し、一人一人が別の人間でも主の名によって一つになれるし、きっと平和を実現できるそのことをかみしめた一日でした。

私たちは、ともにあたたかい生き生きした教会をめざして一步一步を大事にしてゆきたいですね。

今回はゆるしの秘跡を受けた方が多かったよです。祈り求めながら新しい年もお互いを切磋琢磨し主の平和をわたしたちにと世界の為に働き担うことのできる人であればと心の片隅で思います。

【塩谷神父様からのメッセージ】

先日の黙想会で熱心な皆様の信仰に出会い感謝の心で帰りました。聖体拝領、ゆるしの秘跡を受ける人々が多く福山教会は生きいきしていると感じました。午後のベトナム語のミサも力強く美しい祈りと歌でした。よい新年を祈ります。



【チェロ伴奏による聖時間—中村仁さんと共に】

野田茂生



ミカエル神父さまが赴任されて初めての「聖時間」は、厳かかつ静かな聖体礼拝の1時間だった。神父さまが、「山上の説教」の箇所を朗読され、前日に教会で演奏会をやった中村仁さんが再度登場し、チェロ独奏による黙想のための音楽を奏でてもらった。グノーの「アヴェマリア」、「グレゴリオ聖歌」、バッハの「プレリュード」と「アルマンド」、そしてフォークミサでお馴染みの「君は愛されるため生まれた」等、それはそれは美しい、心洗われる音楽だった。神父さまは、黙想の後、会衆に内省を促す説教をされ、静かに終わった。

【久々のクリスマスパーティー】

協働チームの宮田

昨年の12/24クリスマス会が開催されました。ここ数年、コロナ禍ということでずっと中止されていたこともあり久々の開催となりましたので、参加された皆様、大変楽しんでおられたように思います。運営側の我々とはいうと、正直、当日を迎えるまではどうなることかと内心ドキドキしていましたが、いざ始まってみると、あっという間に終わったなと感じています。やはり、参加された方の出し物が良かったですし、何と言ってもミカエル神父様の歌とギター演奏がとても良かったです！ また見たいと思うほどでした。

最後に、このパーティーの準備運営に協力をして頂いた方々に感謝を申し上げます。ありがとうございました。



クリスマスパーティー



【わたしの召命とあかし】

テレサ ファン ティ リエン



今日、私の召命について証ししたいと思います。
私の召命は、洗礼を受ける前から存在していました。それが神様の子となる召命です。

私は幼い頃に洗礼を受けました。ベトナムの私の故郷はほぼみんなカトリックです。

2018年10月に私は留学生として日本に来ました。初めて行った教会は千葉県の松戸教会でした。そこは、ミサに参加する人が少なく、若者は一人もいないし、高齢者ばかりで、私の信仰がちょっと心配になりました。

なぜかという、日本に来たばかりの私には日本語が理解できず、神父様の説教がまったく分かりませんでした。

私の友達の中には、日本語が分からないという理由で教会に行かない人がいます。その時私はいつもその友達を誘って、毎週日曜日のミサに参加し、神様にお祈りしていました。私たちが家族から遠く離れて一人暮らしをしていても、神様がいつも私のそばにいて感じています。

2018年から2019年にかけて、松戸教会はどんどんベトナム人が増えて、やっとベトナム語のミサが行われました。ほんとうに神様に感謝しました。

その間に、私は日本語のミサのほかにベトナム語のミサにもよく参加して、みんなと一緒に神様のことを分かちあったり黙想したりしました。

私が日本に来て、家族から離れても、神様からは絶対離れないと思います。もっともっと私の信仰が強くなりますように、いつも神様に祈っております。それに日本に来たおかげで、私はシスターになりたいという自分の深い望みに初めて気がつきました。

2020年3月、通訳を専門に勉強するため広島県福山市に引っ越しました。ところが、いきなり新型コロナが流行って、教会のミサに行けなくなり、もちろん学校にも行けなくなり、その時点ですべてオンラインミサ、オンライン授業になりました。コロナが早く終わってほしいために、マリア様のロザリオの祈りのグループに参加しました。今はコロナが落ち着いたけれどもそのグループは続いています。“私にとって祈りの生活は、私と神様をつなぐ糸ですから”ととても大切だと思います。

そして3年間の間に、神父様にお知り合いの修道院を紹介していただき、私はいろいろな修道院を訪問して見学し、シスターたちの生活を体験してみました。長い時間神様にお祈りしながら真面目に考えて、来年の4月にナミュール・ノートルダム修道女会に入会することを希望しています。

私の目標は、神様の家である修道院で祈り、人々のために働き、永遠に主のうちに仕えることです。

【ブラザー阿部のみ言葉の分かち合い】～ヨハネによる福音書1章～

『はじめに言(みことば)があった。言は神と共にあった。言は、初めに神と共にあった。万物は神によって成った。』

今日は、ヨハネ福音書の序文を選びました。

私たちの生き方は、イエスの言葉、イエスの生き方にぶれてはいけません。

「言葉」そのものである、神からぶれてはいけません。この言葉に倣い、イエスの姿を学び、ひらすら倣い生きていくこと、この道が私たちの支えです。

イエスから離れることで、私たちは、暗闇に迷ってしまいます。

光を見失わず、光を求めて生きましょう。神さまの光をうけ、いつも人々に輝かせましょう。

光は、輝きだけではなく、暖かさになります。光は神さまの愛です。

新しい年、神さまの光と愛に包まれて、豊かな新しい年を迎えることが出来ますようにお祈りしています。

【寺の住職がびっくりした「数百年後の恩返し」】 共同通信＝下江祐成

床が抜けそうな貧乏寺の改築費用を寄付したのは、まさかの「潜伏キリシタン」の子孫だった 寛容さが現代社会に投げかけるもの

東シナ海を望む長崎市檜山地区にある小高い山「赤岳」。その麓にある天福寺に1978年、少し離れた地区に住む人々が訪れた。寺は貧しく、本堂の床は抜け落ちそうで、天井から雪が舞い込むありさま。お布施の収入は月6万円ほどしかなく、檀家に改築費用を募っている最中だった。

訪れた住人たちは約400万円もの寄付を申し出た。ただ、仏教徒ではないという。

「私たちは潜伏キリシタンの子孫です。お寺のおかげで信仰と命をつなぐことができました。少しでも恩返しをしたい。」

1688年に建立された天福寺は曹洞宗のお寺。にもかかわらず、キリスト教が禁止され、厳しい取り締まりがあった江戸時代に、危険を冒して潜伏キリシタンを檀家として受け入れ、積極的にかくまっていた歴史がある。

「数百年後の恩返し」はあまりに突然だった。申し出を受けた住職は驚くと同時に、ある伝話が浮かび、恐ろしくもなったという。

「もし弾圧する側に回っていたら…」

当時対応したのは、前住職の塩屋秀見さん(70)。塩屋さんによると、赤岳は江戸時代、ローマにつながる御利益がある「聖山」として、潜伏キリシタンたちがひそかにあがめた場所だった。

寄付を申し出たカトリック信者たちは30人ほど。寄付の理由をこう語った。



改築前の天福寺＝長崎市檜山町

「天福寺に何かあったときは助けるようにと、いろり端で代々、伝えられてきたから。」

そして、信仰する教会への不義理と捉えられるのを嫌がったのか、塩屋さんに「自分たちの名前を表に出さないで。」と頼んだという。

塩屋さんは複雑な気持ちになった。

「うれしかった半面、『三時業』という仏語が浮かんで、恐ろしくなった。」

三時業とは、善悪の業の報いを、本人が受けずに死んだとしても、生まれ変わった後に報いを受けるという教え。

数百年前にキリシタンを守った寺の先人たちの善行に対して、本当に世代を超えて報いが来たと実感した。反対に、もし天福寺が当時、キリシタンを弾圧する側に立っていたとしたら、今ごろどうなっていたのだろうかとも思ったという。

▽曹洞宗の寺に、まさかの「マリア像」

天福寺とキリシタンの関係は、それだけではない。

江戸時代、キリシタンを取り締まっていたのは長崎奉行所だが、そこからわずか2キロほどの浦上地区にもキリスト教徒たちは多くいた。1856年ごろ、この地区の信徒たちがキリシタンと疑われる嫌疑が浮上。当時「崩れ」と呼ばれた事件だ。信仰対象が没収されることを危惧した浦上の信徒は、険しい峠を夜中にひそかに越え、マリア観音像を天福寺に託したと伝えられる。その像は、今も本尊の隣に安置されている。外海潜伏キリシタン文化資料館の松川隆治館長によると、浦上の信徒は天福寺に直接持って行ったわけではなく、檜山地区の潜伏キリシタンに預けた。このキリシタンは捕縛されたが、像を預かったことを最後まで否定し、牢屋で亡くなった。



天福寺の本尊（右）隣に安置されているマリア観音像（左）＝10月31日

このキリシタンは捕縛されたが、像を預かったことを最後まで否定し、牢屋で亡くなった。



マリア観音像を天福寺に託し、捕らえられたが自白せず、牢死したと伝えられる潜伏キリシタンの顕彰碑

▽対立と分断が進む世界との大きな違い

塩屋さんは、口を割らなかつたのは天福寺を守ろうとしたからだと考える。権力者の迫害から、お寺とキリシタンが協力してお互いを守った歴史がある。

「互いを認め合う日本人の宗教観や自然観が成した業だと思う。寛容の精神がなければ250年間も『潜伏』なんてできない。」

お寺の歴史を振り返ると、現在の国際社会に深い懸念を感じるという。米中両国の覇権争いやウクライナ危機、イスラエルとイスラム組織ハマスとの戦闘…。対立と分断が進み、他者への寛容性を失っているように見えるからだ。

「例え『正義の戦い』であっても、してはいけない。いったん戦うとお互いが『聖戦』を

叫び、それぞれの一番弱い人たちが犠牲になる。どんなにつらくてもお互い厳しい節制をして非戦の覚悟を決めるのが、政治であり外交力だと思う。」

【南相馬便り 2023年12月】 援助マリア修道会 南相馬修道院 北村令子



世の中はもうクリスマス一色になっておりますが、私たちはまだ、これから降りて来てくださる神を待ち望む時：待降節：を過ごします。

神の子キリストは、御父の言葉として人間の中に降りて来て、私たちと共に住み、共に生きてくださるのです。

「み言葉は人となり、私たちのうちに住まわれた」(ヨハネによる福音書1章)

この福音書のみ言葉は、南相馬の修道院を創立する時のきっかけとなった言葉です。地元の方たちに「私たちのような高齢で力の弱い者でも何か皆さんのお役に立てることができるでしょうか？」との問いに対する答えが、「一緒に住んで、一緒に生きてください」という言葉でした。まさにこの時代にこの地の人々に、キリストの生きた証をすることができる私たちの奉仕です。修道院を開いて、皆さんの中に一緒に住むことによって、ご聖体のイエスがこの地に入って、人々と同じ当事者となって、共に住み、共に生きてくださるのです。私たちは共感だけでも、当事者になって、この地の人々の痛みを同じように痛むことはできません。でも、イエスはこの地の人々と同じ痛みを分かち、御父にその叫びをそのまま伝えてくださるのです。

コロナが少し収まって、今年もたくさんの方々、学生・生徒さんたちがカリタス南相馬にボランティアとして来ていただきました。にもかかわらず、急遽予定を変更して、秋田の豪雨災害で大きな被害を受けた聖霊学園の復旧のために力仕事を引き受けてくださったグループもあります。本当に若い人たちの力強さと柔軟さに、その場に必要なのに答える姿勢に、希望を感じました。

また、この地域の原発事故の被害の現状を視察して、「新しい学びを得て、これからの人生の



歩みの糧となった」という高校生の言葉は、私たちにとって、力になりました。私たちがここに居て、小さな奉仕しかできませんが、訪問者の心に大きな衝撃や今の生き方への問いを与え、彼らがこれからの人生を歩いていくための糧を得て帰られる姿は、神様が確かに働いてくださっているという証です。

私たちが小高の住民になって、はや5年がたつのですが、小高の隣近所の方とのかかわりはほとんど

ありません。まずその一因は私たちが毎日12kmほど離れた原町のカリタス南相馬のボランティアセンターに通って、ほとんど修道院を空けていることです。さらに隣近所と言っても住んでいる家は、点々としており、どんな方が住んでおられるのかさえ分からない状態です。すぐの隣に

は、90歳を超えたおばあちゃんが独り暮らしで住んでおられ、この方とは以前から時々、立ち話もできるかかわりです。

数十メートル先には、2、3軒、夜、明かりがとものるので人が住んでおられることは分かりますが、どんな方かまでは分かりません。そのうちの1軒は去年のいつごろからか、数週間おきに、新潟ナンバーと秋田ナンバーの車が入れ替わり立ち替わりでやって来られるので、子どもさんが独り住まいをしておられる高齢の親御さんの介護をしておられるのかなと想像しています。遠くに避難して、そのままその地で生活が安定したものの、親が高齢になって、独りで生活できなくなったのではないかと想像しています。

震災、特に原発事故の災害によって、バラバラになった家族が、たくさんあります。親の世代は故郷に帰り、子どもの世代は仕事の関係や、学校の関係もあって、家族と一緒に暮らすことを断念したり、また小さな子供を抱えて、放射線の被害を回避したい思いもあり、今もその生活基盤をどこに置くかと悩み葛藤している家族もたくさんあります。私たちの近所の様子を見るだけでも、そのことがうかがわれます。

このような状況の中にあって、私たちは何の手立てもできないし、この人々の不安を解消できるようなことは何もできません。本当に自分たちの無力を毎日感じています。でも、この待降節が示すように、降りて来てくださる神、イエスが、私たちと共にいてくださることを信じて、私たちも共にいることに大きな意味を見出しています。「明かりが灯り、人が居て、一緒に住んでくれる。そのことが、自分たちは忘れられた存在ではないという安心感をもたらすのです。」と地元の人が言われます。幸田司教様のブログ「毎日がクリスマス」は、本当のことです。私はそのことを毎日感じながらここに生きています。

ともに住み、共に生きることがどれほど大きな力であるかは失った時に、分かるものです。

修道院近くの交流センターのイルミネーション。センターの屋根を紫色の輝きが覆っていて、通りかかる人、見る人の心に灯をともします。



【帰天のお知らせ】

Sister マリーリーザ塩谷洋子様(90歳)

謹んでお知らせします。どうぞ心を合わせてお祈りください。

【1月・2月の行事予定】

| 1月 | | 2月 | |
|-------|------------------|-------|------------|
| 1(月) | 神の母聖マリア | 3(土) | 聖園幼稚園生活発表展 |
| | 成人の祝い | 10(土) | 福山市内巡礼 |
| 6(土) | 備後協働体幹事会 | 11(日) | ミカエルフェスタ |
| 7(日) | 主の公現 日曜学校始業式 | | 世界病者の日 |
| 8(月) | 主の洗礼 | 14(水) | 灰の水曜日 |
| 18(木) | キリスト教一致祈祷集会 | 18(日) | 四旬節第1主日 |
| 20(土) | サントニーニョ 司式：白浜司教様 | 25(日) | 四旬節第2主日 |
| 21(日) | 聖トマス小崎巡礼 | | |
| 28(日) | 世界こども助け合いの日(献金) | | |

【編集後記】

新年あけましておめでとうございます。新しい年を迎えるとそれだけで喜びと期待に満ち溢れます。

それが今年には元旦早々から能登半島地震と航空機事故のお知らせでおめでとうございますとは言い難いものがあります。

何時ものように、今日も明日もこの先も同じ毎日が続いていくと思いがちですが、このような大きな災害を目の当たりにした時にハッと目が覚める思いになります。

ニュースで流れていた、子どもの「神様助けてください！」という祈りに、もし私がある場所にいたとして祈りが出来たでしょうか？と考えてしまった。この子の祈りに耳を傾け聞き入れてくださった神に感謝。(MH)

